



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	認知面接と修正版認知面接における出来事の再生と反復提示された誘導情報の情報源再認
Author(s)	白石, 紘章; Shiraishi, Hiroaki; 仲, 真紀子 他
Citation	認知心理学研究, 4(1), 33-42
Issue Date	2006-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44741
Type	journal article
File Information	NSK4-1_33-42.pdf



認知面接と修正版認知面接における出来事の再生と反復提示された誘導情報の情報源再認¹⁾

白石 紘章・仲 真紀子 (北海道大学)

海老原直邦 (富山大学)

The cognitive interview and a modified cognitive interview: Recall for a witnessed event and source recognition of repeated misinformation

Hiroaki SHIRAISHI and Makiko NAKA (*Hokkaido University*)

Naokuni EBIHARA (*Toyama University*)

This study examines the effects of two types of cognitive interview on recall and source recognition of information presented in a film and in a questionnaire. Specifically, the study assesses the effects of interview on the source recognition of repeated misinformation. Seventy-two undergraduates were shown a film followed by questions including items of misinformation. The number of exposures to the misinformation was manipulated, to be 0, 1, or 3 times. Twenty-four hours later, the participants were interviewed in either a cognitive interview (CI), a modified cognitive interview (MCI) consisting of context reinstatement and report everything techniques, or a structured interview (SI). A source recognition test for the misinformation was then given. The results indicated that although the MCI took less time than the CI, they elicited similar levels of misinformation, which were greater than with the SI. However, source recognition performance was better for the CI than for both the MCI and SI. The theoretical and practical implications of these findings are discussed.

Key words: cognitive interview, modified cognitive interview, repeated exposure to suggestion, source misattribution error

本研究は映画で提示された情報の再生, および情報源再認について, 2種類の認知面接の効果を検討したものである。特に, 繰り返し誘導情報を与えた場合の情報源再認について, 面接の効果を評価した。72名の大学生は映画を見た後, 誘導情報を含む事後質問紙に回答した。誘導情報の反復回数は, 0回, 1回, 3回と操作された。24時間後, 参加者は, 認知面接, “文脈の心的再現”と“悉皆報告”教示で構成された修正版認知面接, または構造面接のいずれかを受けた。面接後, 参加者は誘導情報についての情報源再認課題を行った。その結果, 修正版認知面接は, 認知面接よりも所要時間が短いにもかかわらず, 構造面接よりも多くの, 認知面接に匹敵する情報量を引き出した。しかし一方で, 修正版認知面接, 構造面接よりも認知面接で, 情報源判断が優れていた。結果について理論的, 実務的な観点から考察を行った。

キーワード: 認知面接, 修正版認知面接, 誘導情報の反復提示, 情報源誤帰属エラー

認知面接 (cognitive interview, 以下 CI とする) は, 犯罪事件の目撃者から有効な情報を多く引き出すことを目的として 1980 年代に開発された (e.g., Geiselman, Fisher, Firstenberg, Hutton, Sullivan, Avetissian, & Prosk, 1984; Geiselman, Fisher, Mackinnon, & Holland, 1986b).

CI は, 4 つの教示により構成される。第一は, 被面接者に事件の現場を頭の中で再現するよう求める “文脈

の心的再現 (mental reinstatement of context)” 教示である。第二は, 被面接者にとって事件に関して重要でないと思うことやどんなに些細なことでもすべて報告するように求める “悉皆報告 (report everything)” 教示である。これら第一と第二の教示は, 符号化された文脈と検索時の文脈の一致度を高め, 情報量の増加を目的としている。

第三は, 様々な時間順序で再生するよう促す “様々な時間順序 (change order)” 教示である。第四の教示は, 事件を目撃したときの視点とは異なる他の視点から事件を思い出すように促す “視点の変更 (change perspective)” 教示である。これら第三と第四の教示の狙いは, 通常とは異なる検索スキーマを活性化し, 多様な経路に

1) 実験の実施にあたり, 有益な示唆をいただきました富山大学の喜田裕子先生, 黒川光流先生, 結果の評定で多大なご協力をいただきました小浦美保さん, 山崎ひとみさんに心よりお礼申し上げます。

よる情報へのアクセスを促進することである。(Milne & Bull, 2002).

CIは、従来の警察面接と比べて多くの情報を誤った報告を増やすことなく引き出しうるものが、多くの研究により示されてきた(e.g., Geiselman et al., 1984, 1986b). しかし、CIを実際の現場に適用するには以下の2つの問題の検討が必要である。

第一は、犯罪事件後に与えられる事後情報の効果である。一般に、目撃者や被害者は警察官や検察官、あるいは家族や知人などから繰り返し事情聴取を受ける。また、必ずしも確実ではないメディア情報に接触することも多いだろう。このような過程において、目撃者や被害者が誤った事後情報に何度もさらされる可能性は高いと考えられる。

繰り返し提示される事後情報は、情報源誤帰属を高める。例えば Zaragoza & Mitchell (1996) は、事後情報に接触する回数を操作する実験を行った。参加者は映画の1シーンを目撃した後、事後情報が含まれる質問に答え、その上で情報源の再認に回答する。その結果、誤った事後情報に接触する回数が多いほど、それらを目撃したと確信する傾向は強くなり、情報源誤帰属エラーが増加した(Zaragoza & Mitchell, 1996)。こういった誤情報が存在する状況で、CIの効果を検討する必要があると思われる。

CIの教示は情報源の再認にどのような効果をもつだろうか。Lindsay & Johnson (2000)によれば、オリジナルの出来事の情報と誘導情報は記憶において共存し、競合する。そして、符号化時の文脈、思考、感情が誘導情報と結びつくと、偽りの記憶が生成されやすくなるという。“文脈の心的再現”は誘導情報と符号化時の文脈の結びつきを強める可能性があるため、情報源の再認には必ずしも寄与しないのではないだろうか。文脈情報の増加が見込まれる“悉皆報告”も同様かもしれない。これに対し、異なるスキーマを用いることで多様な検索経路の使用を促す“様々な時間順序”と“視点の変更”は、情報へのアクセスのしやすさ、しにくさを際立たせ、情報源の判断を促進するのではないか。このように考えると、CIの教示のうち、“文脈の心的再現”と“悉皆報告”は情報源の再認を必ずしも促進しないが、“様々な時間順序”と“視点の変更”は、情報源の再認を促進すると予想される。

Geiselman, Fisher, Cohen, Holland, & Surtes (1986a)やMilne & Bull (2003)は、4つの教示を含むCIを行うと、後に誘導質問を行っても誤誘導が生じにくくなることを示した。一方で、それぞれの教示を個別に用いたEchlin & Cockerton (1996)においては、必ずしもこのような効果は見られていない。こういった結果の差異は、情報量を増やす教示と多様な検索経路の使

用を促進する教示が、情報源の判断に関し異なる効果をもつことを示唆している。しかし、CI研究で情報源の判断を扱った研究はない。そのため、誤情報を複数回提示し、CIの情報源判断を検討することが必要だろう。

CIを実際に用いる際の問題の第二として、実施に時間がかかるという問題を挙げるができる(Kebbell, Milne, & Wagstaff, 1999)。この問題を解決するために、“様々な時間順序”、“視点の変更”を省略した修正版認知面接(modified cognitive interview, 以下MCIとする)の検討が行われている(e.g., Davis, McMahon, & Greenwood, 2005; Holliday & Albon, 2004)。例えば Davis et al. (2005)は、MCIが、CIと同程度の情報を引き出すにもかかわらず、より短時間で実施できることを示した。

“様々な時間順序”、“視点の変更”の2つの教示を省略することの妥当性は、調査研究、実験室研究によっても支持されている。Kebbell et al. (1999)の調査研究によれば、イギリスの警察官はCIの4つの教示をすべて用いることは時間的に困難だと感じていた。彼らがCIの教示の中で役に立つと考え、頻繁に用いている教示は“文脈の心的再現”、“悉皆報告”であり、役に立たないと感じ、あまり用いていないとされる教示は“様々な時間順序”、“視点の変更”であった。現場では前者2つの教示が特に有効だとされているようである。

実験室研究としては、Geiselman et al. (1986b)を挙げるができる。この研究では、“文脈の心的再現”、“悉皆報告”を単独で用いた。その結果、すべての教示を含むCIには及ばないものの、統制条件の面接よりも多くの情報を引き出した。Milne & Bull (2002)も、CIの4つの記憶促進教示の個別の効果と“文脈の心的再現”と“悉皆報告”の組み合わせについて検討し、“文脈の心的再現”+“悉皆報告”が“文脈の心的再現”以外教示よりも多くの情報を引き出すことを示した。これらの研究によれば、“文脈の心的再現”と“悉皆報告”で構成されるMCIは有効であると考えられる。しかし、MCIを現実適用できるかどうかを示すには、上で論じたように、事後情報を含めた検討を行う必要があるだろう。

そこで本研究では、通常の再生のみならず、事後情報への接触回数を要因に加え、情報源再認課題を用いて面接法の効果を検討する。具体的には参加者に映画を見せ、映画にはない事後情報を0回、1回、または3回提示する。その後、CI、MCI、構造面接(Structured Interview, 以下SIとする)を行い、再生数と事後情報の情報源再認課題を行う。本研究で用いられるSIは、CI、MCIと同じくラポール形成、自由再生、質問、面接の終結という形式で行われる面接法であるが、CIの4つの教示が含まれない点のみが異なる。そのため、本研究

で焦点となる CI, MCI の教示の効果を評価する上でもっとも適した統制条件だといえる。

本研究で検討する予測は以下の 2 つである。上で見たように、再生成績において、MCI は CI に匹敵する正確な情報を SI に比べて多く引き出すだろう。一方で、情報源再認課題では、MCI, SI は CI と比べて情報源誤帰属エラーが多く生じる可能性がある。それは、CI の抵抗効果が CI のみに含まれる“様々な順序”、“視点の変更”に由来すると考えられるためである。

なお、一般に出来事の記述は“いつ（時間）、どこで（場所）、誰が（登場人物）、何を（対象、事物）、どうした（活動）”というフォーマットで語られる（Fivush & Haden, 1997; 藤崎, 1995; 金・仲, 2001; Milne & Bull, 2002）。このような情報は、出来事の基本的な構成要素である。CI や MCI によって想起が促進されるのはどのような情報であるかを明らかにすることは、実務的にも理論的にも重要な課題であると思われる。そこで本研究では、場所、登場人物、対象、事物および活動の再生における CI や MCI の効果を併せて検討する（時間は場面と同期するため検討の対象としなかった）。

方 法

実験参加者

大学生 74 名（男性 31 名、女性 43 名）。そのうち、2 名の参加者（男性 2 名）は目撃イベントの映画を見たことがあったため、分析から除外した。参加者は、ランダムに CI 群、MCI 群、SI 群にそれぞれ 24 名ずつ割り当てられた。映画を見て、事後質問に回答する場所は大学内の心理学実験室であり、面接や再認課題が行われた場所は、大学内のカウンセリングルームであった。自動的な文脈の再構成が生じる可能性をできる限り排除するために、学習と再生を異なる実験室で行った（Milne & Bull, 2002）。

実験計画

3（面接：CI・MCI・SI）×3（誤った事後情報への接触回数：0・1・3）の 2 要因計画である。前者は被験者間計画、後者は被験者内計画であり、主な従属変数は映画の再生成績、および事後情報に関する情報源再認課題の成績であった。

機材

映画の提示にはノート型パーソナルコンピュータ（Sony 製：VAIO PCG-FX33G/BP, 14.1 型液晶）と、Apple 社製 iBOOK G4 (M9426J/A) に接続した 15 型液晶ディスプレイ（e-yama 社製）を用い、面接の録音にはテープレコーダー（Sony 製：Cassette-Corder TCM-400:）と IC レコーダー（Sanyo 製：ICR-S170M(S)）を用いた。また、質問の提示には上記の IC レコーダーを用いた。面接に要した時間はストップウォッチで測定し

Table 1
誘導項目と情報源再認課題で用いた項目

- ・青い T シャツの少年はジーンズをはいていた
- ・かばんを盗まれた男性は黒髪だった
- ・白い柄の服を着た少年のリュックは緑色だった
- ・迷彩柄の T シャツを着た少年は黒いリストバンドをしていた
- ・CD ショップには携帯電話で話をしている人がいた
- ・CD ショップにいた女性は茶色いカバンを持っていた
- ・CD ショップの店員は白いシャツを着ていた
- ・“止まれ”の交通標識があった
- ・“2.5m”の高さ制限を示す標識があった

注 1) 下線の引かれた部分が映画に登場しなかった、あるいは、映画に出てきたものとは異なる部分。
注 2) 各項目の冒頭に“映画の中で”（目撃項目）、または“質問紙の中で”（事後質問項目）を付加したものを情報源再認課題で用いた。

た。

材料

(a) 目撃イベント 映画“リリィ・シュシュのすべて”（ビクターエンタテインメント社製 DVD、監督：岩井俊二, 2001, 日本）の 1 シーンをパソコンのディスプレイで提示した。提示時間は約 90 秒であった。映画の内容は、3 人の少年が電車の中で眠っている老人のバッグを盗み、次に CD ショップで CD を盗んで逃げていくというものである。この刺激を選んだ理由は、邦画であること、犯罪場面を描いていること、血や発砲シーンなど不快な情動を喚起する可能性のあるシーンが含まれていないことであった。

(b) 事後情報 映画提示後の質問紙において、もっともらしいが映画には存在しなかった物あるいは出来事（誘導項目）について質問を行う（Table 1）。9 個の誘導項目（例えばジーンズや黒いリストバンド）を作成し、3 項目ずつ 0 回接触（提示なし）、1 回接触、3 回接触の 3 条件に割り当てた。質問紙には上記の 9 項目を含む/含まない計 27 の質問が含まれていた（Table 2）。

(c) 面接 面接の手続きは、Holliday & Albon (2004) に準じた。また、教示は Geiselman et al. の教示 (1984, 1986b) をもとにした Milne & Bull (1999) の教示（訳書第 3 章の伊東による和訳を一部変更したもの）を用いた（Table 3）。

面接はラポール形成、自由再生、質問、面接の終結の順で行った。ラポール形成では、面接者は被面接者に挨拶し、中立的な質問を行い（e.g., “昨日の映画を見た後、どのように過ごしましたか？”など面接とは関係のない内容）、面接の目的を説明した。次の自由再生では、CI, MCI ではそれぞれに対応する記憶促進教示を与えた後、

Table 2

事後情報質問紙の一例

(誘導項目; 青いTシャツをきてジーパンをはいた少年)

3 回接触条件

1. 最初のシーンで、3人の少年が電車で座っていました。青いTシャツにジーパンをはいた少年だけが立っていました。電車は込み合っていましたか?
10. もう一度、最初のシーンへ戻ります。電車には3人の少年が乗っていました。青いTシャツをきてジーパンをはいた細い少年は、立っていました。3人の少年の中央に座っていたのは、迷彩Tシャツの少年でしたか?
19. シーンの一つ最初で、ジーパンをはいた青いTシャツの少年と迷彩Tシャツの少年がいましたが、どちらが座っていましたか?

1 回接触条件

1. 最初のシーンで、3人の少年が電車で座っていました。青いTシャツの少年だけが立っていました。電車は込み合っていましたか?
10. もう一度、最初のシーンへ戻ります。電車には3人の少年が乗っていました。青いTシャツの細い少年は、立っていました。3人の少年の中央に座っていたのは、迷彩Tシャツの少年でしたか?
19. シーンの一つ最初で、ジーパンをはいた青いTシャツの少年と迷彩Tシャツの少年がいましたが、どちらが座っていましたか?

注) これらの質問は、それぞれの接触条件による3つのセットの質問の例である。0回接触条件では、どのセットにも“ジーパン”という言葉が出てこない。

Table 3

認知面接指示

文脈の心的再構成

“目を閉じてください。自分を映画を見たときと同じ場所に置いてみてください。心の中に映画を見た場所の情景を思い起こしてください。映画を見た部屋のどこにいたのかを考えてください。そのときどのように感じましたか。映画を見た部屋にあった全てのものについて考えてください。そして、心の中に鮮明な状況を描いてください。”

悉皆報告

“それでは、映画の中の出来事について、たとえ、あなたが重要でないと思うことでも、完全に思い出すことができないことでも、どんな些細なことでもいいので、思い出せるすべてのことを話してください。頭に浮かんだことすべてを、あなたのペースで私に話してください。”

様々な時間順序

“できるだけ多くのことを思い出すのに役に立つことをやってみましょう。普通は、映画の出来事について最初から終わりに向かって思い出しますが、今回は、映画の出来事の最後から順に話してください。思ったほど難しくはありません。いいですか、あなたが思い出せる一番最後に起こったことは何ですか…。そのすぐ前に起こったことは何ですか…。さらに、そのすぐ前に起こったことは…(この言葉は被面接者が事件の最初にたどり着くまで繰り返される).”

視点の変更

“それでは、次に、記憶を助けるかもしれないもう1つの技法を試みてみましょう。でも、情報を推測したり予想したりすることはしないでください。あなたが最初に事件をみたときは異なる視点から、あるいは、事件に存在した他者の視点になったつもりで、映画の出来事を思い出してみてください。例えば、映画の中で重要な役割を果たす人物に自分を置いてみたり、その人物が何を見たのかを考えてみてください。”

注) Milne & Bull (1999, 第3章 伊東訳) を一部改変したもの。

自由再生を求めた。そして、SIでは自由再生のみを行った。つづく質問では、被面接者が自由再生で述べたことに基づき質問を行った。最後の面接の終結では、面接者が被面接者の述べた話を要約し、面接への協力と努力に感謝した。

(d) 情報源再認課題 情報源再認課題は Zaragoza & Mitchell (1996) の手続きを参考に作成した。この課題は 24 ペアの文、例えば「映画の中で、青い T シャツの少年はジーンズをはいていた」と「質問紙の中で、青い T シャツの少年はジーンズをはいていた」などの、事後情報の情報源を尋ねる二つの文からなる (Table 1)。

24 ペアのうち 9 ペアは事後情報の誘導情報に関する項目、残りの 15 ペアはフィルター項目であった。誘導項目に関する項目は、3 ペアが 0 接触条件、3 ペアが 1 回接触条件、残り 3 ペアが 3 回接触条件であった。

ペアの文は女性の声で提示し、文と文の間隔は 4 秒とした。提示には IC レコーダーを用いた。なお、文の順序は常に「映画」、「質問紙」の順序とし、ペアの順序はランダムとした (ただし、被験者間では固定とした)。

参加者には、回答用紙に、各文に対する判断と確信度を 7 段階 (絶対はい・きつとはい・たぶんはい・わからない・たぶんいいえ・きつといいえ・絶対いいえ) で評定するよう求めた。

手続き

1 日目の映画の視聴は、個人または最大 3 人のグループで行った。「これからある映画の 1 シーンを見てもらいます。後でこの映画に対する感想や質問などを聞きますので、注意深く見てください」と教示し、映画を提示した。提示終了直後、事後情報質問紙への回答を求めた。回答は自己ペースで進めもらった。その後、翌日映画の出来事に関する話を聞く面接を行う旨を告げ、予約をとった。

翌日 (約 24 時間後)、参加者に映画の出来事に関する面接を行った。なお、面接は個別に行った。実験者はまず自己紹介と挨拶をし、中立的な質問や会話を行い、その上で面接の目的を説明した (ラポール形成)。また、面接を録音することを説明し、承諾を得た。この段階で、IC レコーダーとテープレコーダーのスイッチを入れ、録音を開始した。その後、以下の面接条件に応じた自由再生を行った。

(a) CI (認知面接): 「文脈の心的再現」教示を参加者に与え、その約 5 秒後、次の「悉皆報告」教示を与えた (Davis et al., 2005)。また、参加者がすべてを話したと述べた後、「様々な時間順序」教示と「視点の変更」教示を与えた。そして最後に、「映画の出来事について多くの情報を集めることができました。しかし、今、もう一度、映画の出来事について、できるだけのことを教えてください。すべてのことをあなたのペースで、あな

たの言葉で話してください。」という自由報告を求める教示を行った。

(b) MCI (修正版認知面接): 「様々な時間順序」、「視点の変更」教示が与えられないこと以外は CI 群と同じであった。

(c) SI (構造面接): 「映画の出来事について、あなた自身の言葉で、私に話してください。」と教示し、自由再生を求めた。「悉皆報告」教示の「すべてを」、「できるだけのことを」といった言葉を除くことで、CI・MCI 群における教示との差別化を図った。

以上の自由再生では、参加者が映画の出来事を報告している際中に、実験者が介入することはなかった。

その後、自由再生で言及されたことをもとに質問を行った (e.g., 被面接者が「少年」について言及すれば、「少年」についての説明を求める。言及しなければ「少年」に関する質問は行わない)。原則としてオープン質問を用い、クローズ質問は参加者の述べた情報について補足情報を得るために用いた。質問は映画の出来事に沿ってあらかじめリスト化した項目の中から、参加者の述べたことに関するもののみを用いた。

質問が終わると、実験者は参加者の述べた話を要約し、参加者に感謝し、面接を終えた。

なお、参加者が話しやすい雰囲気を感じていたかどうかを確認するため、面接中の雰囲気について 7 段階で評定するよう求めた。

情報源再認課題

面接の後、情報源再認課題を行った。参加者に、(1) 課題には映画には登場せず質問紙にだけ登場したもの、(2) 映画にだけ登場したもの、(3) 映画と質問紙の両方に登場したもの、(4) 映画と質問紙のいずれにも登場していないものが含まれていることを伝え、自分の記憶をもとに答えを判断するよう教示した。参加者は、聴覚提示されるペアへの判断と確信度を、回答用紙に記入した。

実験終了後、実験者は、実験の本当の目的を告げ、最初に異なる目的を説明したことを謝罪した。

結 果

以下、面接に要した時間について確認した上で、再生成績と情報源再認課題の成績について分析を行う。

面接の時間

MCI の利点は実施時間が短いことだとされている (Davis et al., 2005)。そこでまず、自由再生と質問に要した時間 (分) を算出し、1 要因の分散分析を行った。その結果、CI は平均 15.96 分、MCI は平均 13.4 分、SI は平均 6.34 分であり、面接条件間で有意な差が見られた ($F(2, 69) = 68.34, MSe = 8.72, p < .001$)。Tukey 法による多重比較の結果、CI と MCI、CI と SI、MCI と SI のすべての条件間に差が認められた。

Table 4
各面接条件の再生成績における諸変数それぞれの平均と標準偏差

変数	面接条件					
	認知面接		修正版認知面接		構造面接	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
正答数合計	63.88	12.84	57.83	12.46	38.00	9.78
人情報	14.00	4.07	13.63	4.86	10.13	3.75
活動情報	24.00	5.60	20.75	4.56	12.42	4.30
事物情報	18.17	6.11	16.79	5.16	10.42	3.63
場所状況情報	7.71	2.17	6.67	1.34	5.04	1.40
誤答+作話	2.79	1.83	2.52	2.33	1.44	1.88
誤答	1.23	1.11	1.27	1.14	0.75	1.38
作話	1.56	1.27	1.25	1.68	0.69	0.79
正確性	0.96	0.03	0.96	0.03	0.97	0.03
質問の回数	9.92	1.44	9.83	1.49	9.13	2.09
面接の時間(分)	15.96	3.43	13.40	3.25	6.34	1.66
面接中の雰囲気	5.38	1.22	5.50	1.22	5.13	1.17

注) 正確性は、正答数合計/正答数合計+誤答数+作話数で表される。報告の正確さを示す。

再生成績

スコアリング 実験者は事前に映画に登場する詳細をすべて書き出し、分類した。人に関する情報 (e.g., 外見, 髪型, 服装, 身につけていたもの), 活動に関する情報 (e.g., 何をしたか, どんな状態だったか), 事物に関する情報 (e.g., どんな物があったか, 素材は何か), 場所や状況に関する情報 (e.g., どんな場所だったか, どんな様子だったか) に分類したところ, 映画の詳細はすべてで 245 個であり, 人に関する情報は 85 個, 活動に関する情報は 74 個, 事物に関する情報は 69 個, 場所状況に関する情報は 17 個であった。

次に, 録音された面接の内容を書き起こし, スコア化した。報告内容は, 最初に報告された時点で, 1 点を与えた。例えば, “電車で迷彩服の少年はおじさんのかばんを盗んだ” と再生された場合, “電車で (1 点; 場所状況) 迷彩服の (1 点; 人) 少年は (1 点; 人) おじさんの (1 点; 人) かばんを (1 点; 事物) 盗んだ (1 点; 活動)” とスコア化した。また報告内容は, もしそれが映画と適合していれば正答へ, 矛盾していれば誤答へ (e.g., 茶色いかばんの代わりに赤いかばん), 存在しなければ作話へ (e.g., 帽子) とコード化した (Holliday & Albon, 2004)。

スコア化は研究仮説を知らない評定者 2 名により行われた。1 名は無作為に抽出した参加者 10 名をスコア化し, もう 1 名は 72 名すべての参加者の報告内容をスコア化した。2 名の重複する採点結果間の信頼性を検討するため, 相関分析を行った。その結果, 評定者間に有意な相関関係が見られた (正答数合計; $r=.99$, 誤答

数; $r=.95$, 作話数; $r=.95$, すべて $p<.001$)。

再生成績の結果を, Table 4 に示す。

記憶促進技法以外の要因 結果を分析する前に, CI と MCI の記憶促進技法の効果以外の要因が, 再生成績に影響した可能性を検討した。面接中の雰囲気, 質問の数について面接条件間で分散分析を行った。その結果, 有意な差は見いだせなかった (面接中の雰囲気; $F(2, 69) = 0.58, MSe = 1.51$; 質問の数; $F(2, 69) = 1.51, MSe = 3.01$, すべて ns)。このことから, 本研究で見いだされる差は, 雰囲気や質問数によるものではないといえる。

正答数と正しく再生された情報のタイプ 正再生数について, 面接条件と情報タイプに違いがあるのかどうかを検討するために, 3 (面接条件; 被験者間要因) \times 4 (情報タイプ; 被験者内要因) の分散分析を行った。多重比較には Tukey 法を用いた (以下同様)。その結果, 面接条件 ($F(2, 69) = 30.41, MSe = 36.15, p<.001$), 情報タイプ ($F(3, 207) = 162.31, MSe = 12.36, p<.001$), 交互作用に有意差が見られた ($F(6, 207) = 8.65, MSe = 12.36, p<.001$)。面接条件について多重比較を行ったところ, CI と SI, および MCI と SI に有意な差が見られた。正答数は CI ($M = 63.88$) と MCI ($M = 57.83$) で多く, SI ($M = 38.00$) で最も少ない。情報タイプは活動情報が最も多く, 次いで事物情報, 人情報, 場所状況情報の順に再生数が多かった (順に $M = 19.06, M = 15.13, M = 12.58, M = 6.47$)。

さらに, 交互作用について多重比較を行った結果, 人情報, 活動情報, および事物情報で, CI と MCI が SI よりも有意に高かった (CI, MCI, SI の人情報は 14.00,

13.63, 10.13; 活動情報は 24.00, 20.75, 12.42; 事物情報はそれぞれ 18.17, 16.79, 10.42)。

誤答数と作話数 誤答数と作話数についても正答数と同様に 1 要因の分散分析を行った。その結果、条件間に有意な差は認められなかった。

報告の正確性 再生成績の 1 つの指標として、再生された内容の正確さの割合（正答数、誤答数、作話数を合計した再生成績に対する正答数の割合）を算出した。正確さについて 1 要因の分散分析を行った結果、有意な差はなかった。

以上をまとめると、人情報、活動情報、事物情報では、CI と MCI の両方が SI よりも、誤りを増やすことなく多くの情報を引き出したといえる。場所状況情報に関しては、面接条件による違いは見られなかった。

情報源再認課題

ここでは映画では提示されず、事後質問において提示された 9 個の誘導項目について分析する。前述のとおり、誘導項目への接触回数は 0 回、1 回または 3 回であり、回答は“絶対はい”、“おそらくはい”、“たぶんはい”の 3 段階で求めた。

各ペアは“目撃事象にあった項目”（目撃項目と呼ぶ）と“事後質問にあった項目”（事後情報項目と呼ぶ）からなる。目撃項目に対する“はい”反応（i.e., 絶対/おそらく/たぶんはい）を情報源誤帰属エラー、事後情報項目に対する“はい”反応を正答とした。

確信度が最も高い反応だと考えられる“絶対はい”の反応数は少なく（情報源誤帰属エラーでは .04～.13）、フロア効果が懸念されたため、より低い確信度の反応を

Table 5
目撃項目と事後質問項目における判断基準ごとの“はい”反応数の平均と標準偏差

目撃項目（情報源誤帰属エラー） 判断基準	誘導情報への接触回数						
	0		1		2		
	M	SD	M	SD	M	SD	
絶対のみ	CI	0.08	0.28	0.04	0.20	0.13	0.33
	MCI	0.08	0.28	0.08	0.28	0.13	0.44
	SI	0.04	0.20	0.04	0.20	0.13	0.44
	面接条件合計	0.07	0.25	0.06	0.23	0.13	0.41
絶対+おそらく	CI	0.33	0.55	0.29	0.54	0.25	0.52
	MCI	0.17	0.37	0.17	0.37	0.75	0.66
	SI	0.17	0.37	0.42	0.64	0.79	0.71
	面接条件合計	0.22	0.45	0.29	0.54	0.60	0.68
絶対+おそらく+たぶん	CI	0.58	0.86	0.79	0.71	0.71	0.84
	MCI	0.79	0.91	0.79	0.71	1.21	0.82
	SI	1.00	0.87	0.83	0.75	1.04	0.78
	面接条件合計	0.79	0.90	0.81	0.72	0.99	0.81
事後質問項目（正しい情報源帰属）							
絶対のみ	CI	0.13	0.33	0.25	0.60	0.79	0.91
	MCI	0.04	0.20	0.25	0.52	0.67	0.75
	SI	0.08	0.28	0.50	0.71	0.83	0.80
	面接条件合計	0.08	0.28	0.33	0.62	0.76	0.82
絶対+おそらく	CI	0.29	0.45	0.58	0.70	1.50	0.91
	MCI	0.08	0.28	0.33	0.55	1.17	0.94
	SI	0.25	0.43	0.63	0.75	1.17	0.99
	面接条件合計	0.21	0.41	0.51	0.69	1.28	0.96
絶対+おそらく+たぶん	CI	0.54	0.64	0.96	0.84	1.71	0.73
	MCI	0.17	0.37	0.54	0.64	1.38	0.99
	SI	0.54	0.76	0.71	0.79	1.42	0.95
	面接条件合計	0.42	0.64	0.74	0.78	1.50	0.91

注) 最大反応は 3.

含めた“絶対はい+おそらくはい”の反応数, さらに低い確信度の反応を含む“絶対はい+おそらくはい+たぶんはい”の3つの測度について分析を行った。以下, 特に記さない限り, 3 (面接条件; 被験者間要因) × 3 (接触回数; 被験者内要因) の2要因分散分析を用い, 多重比較には Tukey 法を用いる。結果を Table 5 に示す。

目撃項目に対する情報源誤帰属エラー まず, 参加者ごとに“はい”と回答した反応数を算出した。分散分析の結果, “絶対はい”と“絶対はい+おそらくはい+たぶんはい”では条件間に差は見られず, “絶対はい+おそらくはい”においてのみ, 接触回数の主効果 ($F(2, 138) = 10.87, MSe = 0.26, p < .001$), 交互作用が見られた ($F(4, 138) = 4.31, MSe = 0.26, p = .005$)。接触回数と交互作用について多重比較を行ったところ, 3回接触条件において, 0回, 1回接触条件よりも多くの情報源誤帰属エラーが生じていた。そして, 交互作用では, 3回接触条件で MCI, SI が CI よりも情報源誤帰属が有意に多く生じていた。

事後情報項目に対する正しい情報源への帰属 分散分析の結果, “絶対はい+おそらくはい+たぶんはい”において, 面接条件 ($F(2, 69) = 3.66, MSe = 0.69, p < .005$) と接触回数の主効果があった ($F(2, 138) = 38.57, MSe = 0.58, p < .001$)。多重比較の結果, 誘導項目への接触回数が多いと, “誘導項目を事後質問で読んだ”と正しく帰属できること, 特に CI では, MCI よりも正しい帰属が多いことが示された。“絶対はいのみ”, “絶対はい+おそらくはい”では接触回数の主効果のみが見られた (順に $F_s(2, 138) = 23.39, 41.91, MSe = 0.36, 0.52$, ともに $p < .001$)。誘導項目への接触回数が多いほど, “事後質問で読んだ”とする正しい帰属が多かった。

考 察

本研究では, CI (認知面接) と MCI (修正版認知面接) の効果を, 映画内容の再生と事後情報の情報源再認に関して検討した。以下, まず再生数について, 次に事後情報の反復が情報源誤帰属エラーや正しい帰属 (事後情報項目を“事後質問にあった”) と正しく帰属させることに及ぼす効果を, 面接法と関連させながら論じる。

面接の効果 Davis et al. (2005) でも示されたように, MCI は CI よりも短時間で行うことができた。およそ 2/3 の時間で行えたにもかかわらず, MCI は CI と同様, SI よりも多くの情報を, 誤りを増やすことなく引き出すことができた。このことは多くの研究結果と一致し, MCI の有効性を支持するものである (e.g., CI と SI; Geiselman et al., 1984, 1986b; MCI; Davis et al., 2005; Holliday & Albon, 2004)。

再生された情報をタイプ別に見ると, 人情報, 活動情

報, そして事物情報が CI と MCI でともに SI よりもよく想起されていた。これらの情報が CI で多く引き出されることは Milne & Bull (2003) を支持する結果である。CI, MCI の教示を用いることでより詳細な情報を引き出すことができることが示されたといえるだろう。

では, CI, MCI, SI の違いは何なのか。SI と MCI の違いは文脈手がかりと情報量の増加を目的とする“文脈の心的再現”と“悉皆報告”であった。そして MCI と CI の違いは多様な検索経路の使用を促す“様々な時間順序”と“視点の変更”であった。MCI が CI と同程度の正答を引き出していたことから, CI における多くの情報を引き出す効果は, “文脈の心的再現”と“悉皆報告”の2つの教示に起因すると考えられる。

接触回数が情報源誤帰属エラーに及ぼす効果 接触回数の効果は, どの面接法においても見られた。0, 1回では情報源誤帰属エラーが増加することはなかったが, 接触回数が3回するとき, CI では MCI, SI よりも情報源誤帰属エラーが生じにくかった。

Echlin & Cockerton (1996) では, 1回の事後情報であっても, CI の効果は低下した。Zaragoza & Mitchell (1996) においても, 誘導情報への接触回数が1回であっても, 0回の場合に比べ, 情報源誤帰属エラーは増加した。

これに対し本研究では, 1度の接触では情報源誤帰属エラーが増加することはなかった。CI, MCI, SI と同様であるので, この効果は3つの面接法に共通な自由再生, すなわち出来事を自発的に, 自分の言葉で説明することによって生じたのかもしれない (Poole & White, 1991, 1993; Sharman, Manning, & Garry, 2005)。例えば Poole & White (1993) は, オープン質問に対する回答は2年後も比較的正確であるのに対し, クローズ質問に対する回答では誤りが増えることを示している。本研究でも, 参加者が出来事を自発的に報告することによって, 映画で見た情報の記憶が体制化され, 誘導項目との弁別が促進されたのかもしれない。

また, 本研究ではどの面接条件においても, 再生された情報は正確であり, その値は他の研究と比較しても高かった (CI; $M = 0.96$, MCI; $M = 0.96$, SI; $M = 0.97$)。例えば Davis et al. (2005) では CI; $M = 0.81$, MCI; $M = 0.79$, SI; $M = 0.78$; Holliday & Albon (2004) では CI; $M = 0.85$, MCI; $M = 0.85$, SI; $M = 0.85$ である。記憶が正確であった理由が映画の内容によるのか, 面接までの間隔が24時間であったためなのか, 現段階では特定することはできない。しかし, このように記憶が正確であったため, 1回程度の事後情報の効果は相対的に弱かったという可能性も考えられる。

一方, 3回接触条件で CI は MCI, SI と比べて情報源誤帰属エラーが生じにくかった。CI に含まれ, MCI に

は含まれない教示は“様々な順序”と“視点の変更”である。先に、これらの教示は情報へのアクセスのしやすさ、しにくさを際立たせ、見たものと見ていないものの区別を促進すると考えた。本研究の結果はこのような考えを支持しているといえるだろう。

一般に、これらの教示に従うことは負荷が高いとされる（例えば Milne & Bull (1999) はこの2つを子どもに対して行うことは困難だとしている）。視覚的に提示されていない事後情報に対しこれらの教示を用いることはさらに難しく、十分なイメージが喚起されなかったのかもしれない。映画で見た情報については十分なイメージが得られるが、事後情報については十分なイメージが得られなかったため、事後情報は質問紙で見たという正しい帰属が可能であったのだと推察することができる。これらの教示が、見たものと見ていないものの区別を確かに促進するかどうか、今後さらに検討すべき問題であろう。いずれにせよ、この結果は、事後情報や誘導質問が繰り返し与えられる可能性のある現実の取り調べ場面で CI が有効であることを示唆している。

情報源誤帰属エラーと事後質問への正しい情報源帰属の確信について 本研究では、情報源誤帰属エラーと事後質問への正しい情報源帰属の効果、“絶対はいのみ”、“絶対はい+おそらくはい”、“絶対はい+おそらくはい+たぶんはい”の3つの測度について分析した。その結果、情報源誤帰属エラーでは“絶対はい+おそらくはい”において、正しい情報源帰属では“絶対はい+おそらくはい+たぶんはい”において、面接の主効果、交互作用が見られた。このような結果は、面接の効果と反応の確信度とに何らかの関係があることを示唆している。しかし現段階では、確信度と認知面接技法との関係は不明である。認知面接技法が想起された出来事の確信度にごう影響するのかも、今後の重要な検討課題である。

結論と今後の方向

MCI は CI よりも短時間で行うことができるにもかかわらず、おおむね CI と同様、SI よりも正確な情報を、誤りを増やすことなく引き出し得ることを示した。しかし、情報源の再認には、CI で用いられる2つの教示が欠かせないことも示された。CI をより短時間でより有効に行うためにはどのような教示を取り入れ、どの教示をはずせばよいのか。今後は各教示の効果を個別に見ていくことが必要である。

引用文献

Davis, M. R., McMahan, M., & Greenwood, K. M. (2005). The efficacy of mnemonic components of the cognitive interview: towards a shortened variant for time-critical investigations. *Applied Cognitive Psychology*, 19, 75-

93.

Echlin, D., & Cockerton, T. (1996). The misinformation effect and the individual mnemonics of the cognitive interview. *Issues In Criminological and Legal Psychology*, 26, 58-66.

Fivush, R., & Haden, C. A. (1997). Narrating and representing experience: Preschoolers' developmental autobiographical accounts. In P. W. v. d. Broek, P. J. Bauer, & T. Bourg (Eds.), *Developmental spans in event comprehension and representation: Bridging fictional and actual events*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers. pp.169-198.

藤崎春代(1995). 幼児は園生活をどのように理解しているのか：一般的出来事表象の形成と発達的变化 発達心理学研究, 6, 99-111.

Geiselman, R. E., Fisher, R. P., Cohen, G., Holland, H., & Surtes, L. (1986a). Eyewitness responses to leading and misleading questions under the cognitive interview. *Journal of Police Science and Administration*, 14, 31-39.

Geiselman, R. E., Fisher, R. P., Firstenberg, I., Hutton, L. A., Sullivan, S. J., Avetissian, I. V., & Prosk, A. L. (1984). Enhancement of eyewitness memory: an empirical evaluation of the cognitive interview. *Journal of Police Science and Administration*, 12, 74-80.

Geiselman, R. E., Fisher, R. P., Mackinnon, D. P., & Holland, H. L. (1986b). Enhancement of eyewitness memory with the cognitive interview. *American Journal of Psychology*, 99, 385-401.

Holliday, R. E., & Albon, A. J. (2004). Minimising misinformation effects in young children with cognitive interview mnemonics. *Applied Cognitive Psychology*, 18, 263-281.

Kebbell, M. R., Milne, R., & Wagstaff, G. F. (1999). The cognitive interview: a survey of its forensic effectiveness. *Psychology, Crime & Law*, 5, 101-115.

金 敬愛・仲 真紀子(2002). 中国人親子による出来事の対話：母親と父親は幼児の出来事の語りをどのように引き出すか 発達心理学研究, 13, 274-283.

- Lindsay, D. S., & Johnson, M. K. (2000). False memories and the source monitoring framework Reply to Reyna and Lloyd (1997). *Learning and Individual Differences*, *12*, 145-161.
- Milne, R., & Bull, R. (1999). *Investigative interviewing; Psychology and practice*. Wiley: Chichester.
(ミルン, R. & ブル, R. 原 聰 (編訳) (2003). 取調べの心理学—事実聴取のための捜査面接法 北大路書房)
- Milne, R., & Bull, R. (2002). Back to basics: A componential analysis of the original cognitive interview mnemonics with three age groups. *Applied Cognitive Psychology*, *16*, 743-753.
- Milne, R., & Bull, R. (2003). Does the cognitive interview help children to resist the effects of suggestive questioning? *Legal and Criminological Psychology*, *8*, 21-38.
- Poole, D. A., & White, L. T. (1991). Effects of question repetition on the eyewitness testimony of children and adults. *Developmental Psychology*, *27*, 975-986.
- Poole, D. A., & White, L. T. (1993) Two years later: Effect of question repetition and retention interval on the eyewitness testimony of children and adults. *Developmental Psychology*, *29*, 844-853.
- Sharman, S. J., Manning, C. G., & Garry, M. (2005). Explain this: explaining childhood events inflates confidence for those events. *Applied Cognitive Psychology*, *19*, 67-74.
- Zaragoza, M. S., & Mitchell, K. J. (1996). Repeated exposure to suggestion and the creation of false memories. *Psychological Science*, *7*, 294-300.
- (2005年8月16日受稿, 2006年4月20日受理)